

開催にあたって

先進インスリン療法研究会は2001年インスリンアナログ製剤が日本で初めて市販されたのとほぼ同時にスタートしました。その後、持効型や混合型アナログ製剤が相次いで臨床の場に導入され、インスリンアナログは21世紀の糖尿病診療に不可欠の治療薬となっています。第7回を迎える本年は、従来のヒトインスリンを含めて様々な薬物動態をもつインスリン製剤が出揃った年といえるでしょう。インスリン注入デバイスも、ペン型注入器の改良に加え持続皮下インスリン注入(CSII)装置の多くが基礎注入速度のプログラム可能なものとなりましたし、皮下組織間液のグルコース濃度を5分間隔で測る持続血糖測定装置が実用化されるなど、技術的な進歩も目覚ましいものがあります。

一方、正常血糖を目指した積極的な強化インスリン療法が細小血管合併症の発症を予防できるだけでなく、長期間にわたって大血管合併症を抑制しうることがDCCTの予後調査で証明されました。さらに、血管合併症の予防にはHbA_{1c}を低下させるだけでなく、食後高血糖を抑制した血糖変動の安定化が重要であることが広く認識されてきました。

しかし、糖尿病治療の現場においては、1回あるいは2回注射の「従来法」の比率がまだまだ高く、最善の治療が十分普及しているとはいえません。もちろん、1型糖尿病はもとより2型糖尿病であっても、食前・食後・夜間を通じて良好な血糖コントロールを実現するのは容易なことではありません。インスリン分泌が低下した症例で、低血糖を回避しつつこの困難な課題を果たすには、インスリン製剤の特徴を深く理解し、新しい技術を駆使した治療手段が要求されます。

そこで本研究会のテーマは「21世紀のインスリン治療戦略-最新インスリンでどこまで出来るか-」としました。ご応募いただいた多くの一般演題に加え、講演、体験談などを通じて、先進的インスリン治療の現状と未来について討議し、理解を深めることができる研究会になることを期待しています。多数の方々のご参加をお待ちしております。



第7回先進インスリン療法研究会当番世話人
久留米大学医学部 内科学講座
内分泌代謝内科部門
山田 研太郎